様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３２３０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５６４

研究課題名（和文）北関東におけるベイ表現の動態に関する研究

研究課題名（英文）A Study in Dynamics of BEI Expression in 3 Prefectures in Northern Kanto Region

研究代表者
佐藤　高司（Sato, Takashi）

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・教授

研究者番号：８０３９０４０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,300,000円、（間接経費）　390,000円

研究成果の概要（和文）：群馬、栃木、茨城の北関東3県において、若年層及び中年層のベイ表現に関する使用意識調査を行った。
　ベイ表現の使用・不使用意識に関しての主な調査結果は次の通りである。地域差があり、栃木の使用意識は高く茨城は低かった。若年層ではその差が顕著であった。世代差があり、使用・不使用ともに若年層が高い傾向にあった。性差は顕著ではないが、男性の使用意識が高かった。
　ベイ表現に関しては、最有力のベイ表現に極端な地域差はないが、それに次ぐベイ表現に地域的な特色が見られた。世代差として中年層に多様さがうかがえた。推量表現よりも意志・勧誘表現にベイ表現がより多く使用されている傾向が見られた。

研究成果の概要（英文）：A survey about BEI expression is carried out in the northern Kanto region to find the preferences between young-aged and middle-aged generation.
Regional differences are remarkably found; while awareness of using BEI expression is high in Tochigi, Ibaraki was low. Of cause, there is also a generation gap between the young and the middle-aged people. The young people are clearly divided into use or non-use of BEI expression. Gender difference is not significantly observed, however the male had higher awareness of their usage.As for Dominant-BEI expression, there are not significant regional differences. However, the secondary BEI expression has regional differences. As for generation, the middle-aged people use a variety of BEI-expression such as "will" and "solicitation" rather than "guess".

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：ベイ表現　動態　北関東

１．研究開始当初の背景

本研究の背景には、次の(1)～(5)のような群馬県における若年層の方言使用実態に関する調査結果（佐藤髙司 2011「群馬県における新方言の動態」『大都市圏言語の影響による地域言語形成の研究』科研費基盤研究（C）課題番号 20520412 研究成果報告書)がある。

(1)1992 年～2009 年の 17 年間で、若年層男子における意志・勧誘のベイ表現は衰退傾向にある。

(2)推量のダンベーは衰退傾向にある。

(3)1980 年頃から使用が見られた新しい推量表現のンベーは、1992 年頃までは使用を伸ばしたが、その後 2009 年までの間に見られる方言的なベイ表現の衰退傾向の影響を受け、使用が減少傾向にある。

(4)推量をダンベーからベーにという単純化は現在も進行中であり、動詞、形容詞、名詞へのベーの単純接続表現は 1980 年から 2009 年にかけて使用が伸びている。

(5) 2009 年調査では、ベイ表現を若年層において男子より女子が多く使用する傾向が見られ、方言のアクセサリー化、おもちゃ化傾向と考えられた。

これらの群馬県若年層における方言使用実態を受け、広く東日本一帯で使用されるベイ表現の使用実態を把握とそのメカニズムの解明を目指す。なお、ベイとは、いわゆる「関東ベイ」と呼ばれ東日本方言、関東方言の象徴ともいえる方言形式ベイ類（意志・勧誘・推量など）である。ベイ表現とはベイ類を使用する一連の言語表現をさす。

２．研究の目的

本研究の目的は、現代の東日本におけるベイ表現の動態を明らかにしそのメカニズムを解明する前段階として、北関東 3 県におけるベイ表現の動態を把握することである。そこから、ベイ表現の変容を言語内的要因、地理的要因、歴史的要因、社会的要因等から考察し、北関東のベイ表現の変容のメカニズムを明らかにすることを目指す。ベイ表現とは、いわゆる「関東ベイ」と呼ばれる一連の言語表現である。

３．研究の方法

ベイ表現の動態把握のために、若年層、中年層及び高年層に対し言語調査を行う。若年層及び中年層については多人数アンケート調査を行う。高年層については面接調査を行う。なお、高年層の面接調査は「方言の形成過程解明のための全国方言調査」結果を活用することとした。

以下の研究成果では、若年層及び中年層に対して行った多人数アンケート調査について述べる。

４．研究成果

（１）調査の概要

①調査の目的

北関東 3 県における若・中年層に視点を当て、ベイ表現の動態を把握することである。

②調査方法

多人数にアンケート用紙を配布し、回収するアンケート調査である。

③調査項目

調査項目は、9 項目とフェイスシートである。9 項目について、ベ・ペをつけて言うか、「よく言う」、「ときどき言う」とき、どんないい方か、を問うている。回答には選択肢を用意した上で、自由記述欄を設けている。9 項目の質問内容は次のとおりである。(1)「あの人はたぶん先生だろう」というとき。(2)友達から「あの人は今日学校に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら「たぶん行くだろう」と答えるとき 。(3)学校への道を歩いている人を見て、友達から「あの人はどこへ行くのだろうか」と聞かれ、「学校に行くのだろう」と答えるとき。(4)友達から「あの人は昨日学校に行っただろうか」と聞かれ、「行っただろう」と答えるとき 。(5)学校の封筒を持って歩いている人を見て「あの人はどこへ行ったのだろうか」と聞かれ、「学校に行ったのだろう」と答えるとき。(6)友達から「あの人は今日学校へ行くだろうか」と聞かれ、迷いながら「たぶん行かないだろう」と答えるとき。(7)買い物に行かなければならないことを思い出し、時間的にも間に合いそうな場合、そうしよう、という気持ちで、「さあ、買い物に行こう」とつぶやくとき。(8)友達から旅行に行くように促されて、だんだん行く気になってきて、話し相手に対して「それじゃ、行こう」などのように、自分が行くつもりになっていることを伝えるとき。(9)友達を旅行に誘ったのですが友達は迷っていて、「いっしょに行こうよ」と誘うとき。

④調査項目の意図

調査項目の意図は、次の(1)～(9)である。

(1)名詞叙述文における推量表現でのベイ表現の実態を把握する。(2)動詞に接続する最も基本的な推量表現でのベイ表現の実態を把握する。(3)調査項目(2)に対して、「のだ」文の推量表現でのベイ表現の実態を把握する。(4)調査項目(2)に対して、過去推量表現でのベイ表現の実態を把握する。(5)調査項目(4)に対して、「のだ」文の過去推量表現でのベイ表現の実態を把握する。(6)否定推量表現でのベイ表現の実態を把握する。(7)独話としての意志の表現でのベイ表現の実態を把握する。(8)聞き手に対する伝達性を伴った意志表現でのベイ表現の実態を把握する。(9)勧誘表現でのベイ表現の実態を把握する。

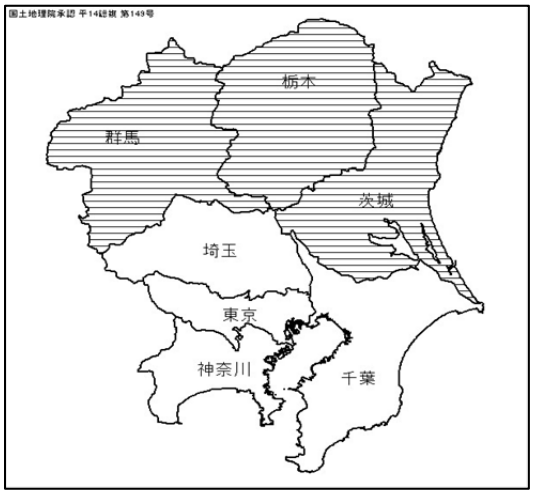
⑤調査対象及び調査時期

（若年層）

調査場所：共愛学園前橋国際大学、白鷗大学、茨城大学

調査対象：大学生
調査時期：2011 年 6 月～2013 年 5 月
調査人数：688 名（男性 244 名、女性 437 名、未記入 7 名）
（中年層）
調査場所：共愛学園前橋国際大学・中学高校、白鷗大学、茨城工業高等専門学校
調査対象：教職員
調査時期：2013 年 3 月
調査人数：204 名（男性 130 名、女性 71 名、未記入 3 名）

⑥調査地域



⑦調査票
紙幅の都合上、省略する。

（2）調査結果
調査結果は、①地域差、②世代差、③性差④地域差×世代差、⑤地域差×性差、⑥世代差×性差、⑦ベイ表現について、数値とグラフで示した。（佐藤髙司 2014『北関東におけるベイ表現の動態に関する研究』科研費基盤研究（C）課題番号 23520564 研究成果報告書 pp.19-87）

（3）調査結果の考察
①地域差
ベイ表現を使用しているという意識の地域差を見る。ここでは、「ベ・ペをつけて言いますか」という問いに対して「よく言う」と「ときどき言う」と回答した人の割合の合計をベイ表現を使用しているという意識を持つ人の割合と考える。
9 調査項目の全体的な傾向として、ベイ表現を使用しているという意識を持つ人の割合を北関東 3 県の中で比べた場合、栃木県が最も高いことが見て取れる。次いで、群馬県、茨城県の順となる。ただし、群馬県と茨城県にはあまり大きな差異は認められない。北関東に位置する 3 県において、ベイ表現を使用しているという意識を持つ人の割合には地域差があることが読み取れる。
次に、ベイ表現を耳にするという意識の地域差を見る。ここでは、「ベ・ペをつけて言わないが聞く」と回答した人の割合をベイ表現を耳にするという意識を持つ人の割合と考える。
推量表現（調査項目 1～6）と勧誘表現（調査項目 9）においては、群馬県が最もその割合が高い傾向にあり、意志表現（調査項目 7 及び 8）においては、茨城県が最も高い傾向にあった。これは、推量表現と勧誘表現のベイ表現を耳にすると感じている人の割合が北関東 3 県の中では群馬県が最も多く、勧誘表現のベイ表現を耳にすると感じている人の割合は茨城県が最も多いということである。ベイ表現を耳にするという意識の割合に、意味による地域差が生じていることが読み取れる。
最後に、ベイ表現を使用しないという意識の地域差をみる。ここでは、「ベ・ペをつけて言わないし聞かない」と回答した人の割合をベイ表現を使用しないと意識している人の割合と考える。
9 調査項目の全体的な傾向として、ベイ表現を使用しないと意識している人の割合を北関東 3 県の中で比べた場合、茨城県が最も高いことが見て取れる。次いで、群馬県、栃木県の順となるが、群馬県と栃木県にはあまり大きな差異は認められない。北関東に位置する 3 県において、ベイ表現を使用しないと意識している人も割合にも地域差があることが読み取れる。
北関東 3 県におけるベイ表現の使用・不使用意識には地域差があることを確認した。使用意識が最も高いのは栃木県、不使用意識が最も高い傾向にあるのは茨城県であった。また、ベイ表現を耳にする（使わないが聞く）と意識する人の割合にも地域差があり、推量表現と勧誘表現では群馬県が、意志表現では茨城県が最も高かった。

②世代差
ベイ表現を使用しているという意識の世代差を見る。ここでは、「ベ・ペをつけて言いますか」という問いに対して「よく言う」と「ときどき言う」と回答した人の割合の合計をベイ表現を使用していると意識する人の割合と考える。
9 調査項目のすべてにおいて、ベイ表現を使用しているという意識を持つ人の割合は、若年層が中年層を上回る傾向にある。推量表現（調査項目 1～6）を使用しているという意識は、若年層が 19～28%と全体のほぼ 1/5～1/4 であるのに対し、中年層においては、16～22%と全体のほぼ 1/4 以下である。意志表現（調査項目 7 及び 8）及び勧誘表現（調査項目 9）を使用しいているという意識は、若年層が 35～40%、中年層は 25～29%であり、10%ほどの若年層が高い。北関東 3 県においては、ベイ表現を使用しているという意識に世代差が存在していることが読み取れる。
次に、ベイ表現を耳にするという意識の世

代差を見る。ここでは、「べ・ぺをつけて言わないが聞く」と回答した人の割合をベイ表現を耳にすると意識する人の割合と考える。9 調査項目のすべてにおいて、ベイ表現を耳にすると感じている人の割合は、中年層が若年層を上回る傾向にある。推量表現（調査項目 1～6）を耳にするという意識は、若年層が 24～36%と全体のほぼ 1/4～1/3 であるのに対し、中年層においては、38～51%と全体のほぼ 2/5～1/2 である。意志表現（調査項目 7 及び 8）及び勧誘表現（調査項目 9）を使用しいているという意識は、若年層が 29～30%、中年層は 41～47%であり、10%以上中年層が高い。北関東３県においては、ベイ表現を耳にすると意識する人の割合には世代差が存在していることを読み取ることができる。

最後に、ベイ表現を使用しないという意識の世代差をみる。ここでは、「べ・ぺをつけて言わないし聞かない」と回答した人の割合をベイ表現を使用しないと意識している人の割合と考える。

9 調査項目の全体的な傾向として、ベイ表現を使用しないと意識している人の割合は、中年層よりも若年層の方が多い。ベイ表現を使用しないと意識している人の割合にも世代差があることが読み取れる。

北関東３県におけるベイ表現の使用・不使用意識には世代差があることを確認した。ベイ表現を使用すると意識している人の割合も、使用しないと意識している人の割合も、中年層よりも若年層が高い傾向にあった。また、ベイ表現を耳にする（使わないが聞く）と意識する人の割合にも世代差があり、若年層よりも中年層の方がその割合が高かった。

北関東においてベイ表現の使用意識が中年層よりも若年層の方が高い傾向にあるということは、若い世代に向けて共通語化が進むという一般的な考え方が、必ずしも正しいとは言えないとする結果であり、注目に値する。

③性差

ベイ表現を使用しているという意識の性差を見る。ここでは、「べ・ぺをつけて言いますか」という問いに対して「よく言う」と「ときどき言う」と回答した人の割合の合計をベイ表現を使用していると意識する人の割合と考える。

推量表現（調査項目 1～6）と勧誘表現（調査項目 9）のベイ表現を使用していると意識する人の割合は、女性より男性の方が多い傾向にある。意志表現（調査項目 7 及び 8）のベイ表現を使用していると意識する人の割合には、性差は認められない。

次に、ベイ表現を耳にするという意識の性差を見る。ここでは、「べ・ぺをつけて言わないが聞く」と回答した人の割合をベイ表現を耳にすると意識する人の割合と考える。

9 調査項目中、過去推量表現（調査項目 4）を除く８調査項目において、ベイ表現を耳にすると感じている人の割合は、男性よりも女性の方が多かった。しかし、その差はわずかで、最もその差の大きい勧誘表現（調査項目 9）でも７%で、それ以外はすべて５%以下の差であった。なお、過去推量表現（調査項目 4）のベイ表現の男女差は０であった。北関東３県においては、ベイ表現を耳にすると意識する人の割合は、やや女性が多いものの、性差はほとんど認められないと考えてもよいだろう。

最後に、ベイ表現を使用しないという意識の性差をみる。ここでは、「べ・ぺをつけて言わないし聞かない」と回答した人の割合をベイ表現を使用しないと意識している人の割合と考える。9 調査項目中、独話意志表現（調査項目 7）を除く８調査項目において、ベイ表現を使用しないと意識している人の割合は、男性よりも女性の方が多かった。なお、独話意志表現（調査項目 7）のベイ表現の男女差は０であった。

北関東３県におけるベイ表現の使用・不使用意識には性差があることを確認した。ベイ表現を使用すると意識している人の割合は女性よりも男性の方が多く、使用しないと意識している人の割合は男性よりも女性の方が多い傾向にあった。ただし傾向は顕著とは言えない。また、ベイ表現を耳にする（使わないが聞く）と意識する人の割合には性差を認められなかった。

④地域差×世代差

若年層では、9 調査項目すべてにおいて、地域差が顕著に表れた。特に、ベイ表現を使用する栃木県の若年層の傾向は顕著であった。これに対し、中年層では必ずしも栃木県がベイ表現を使用する傾向が最も高いわけではなく、地域差も僅かであった。北関東においては、若年層が中年層よりもベイ表現を使用する傾向が高いが、北関東の内部においては、若年層に地域差があり、その地域差は必ずしも中年層とは一致しないということである。

若年層の地域差と中年層の地域差がとが必ずしも一致しない要因は、若年層が学生であるのに対し中年層が社会人であることであろう。中年層は、若年層に比べより高い社会的な立場で、かつ地理的により広い社会生活の場で生活を営む、あるいは営まざるを得ないことから、自然と共通語化が進み、地域差が僅かとなる均一化へと進むものと考えられる。

⑤地域差×性差

ベイ表現を使用すると意識する傾向の高い県は男性女性ともに栃木県であり、使用しないと意識する県は男性女性ともに茨城県であった。この結果は全体の地域差ときれいに一致した。

ところで、ここでは、今までの地域差や性差ではあまり見えてこなかった点に注目し

たい。それは、栃木県における男女差である。9 調査項目中 6 調査項目において、女性をはるかに超えて男性の使用意識が高い。調査項目 1～4 及び 6 は、推量表現である。栃木県の男性において推量表現のベイ表現が盛んに使用されているという事実の指摘は、この調査研究の一つの成果と考えられる。

⑥世代差×性差

性によるベイ表現の使用意識の割合を世代ごとに見てみよう。

若年層においては、9 調査項目中 8 調査項目において、ベイ表現を使用する意識は男性が女性を上回るものの、その差は極めて僅かである。調査項目 7（独話としての意志表現）においては、ベイ表現を使用する意識が僅かに男性を女性が上回っている。

中年層におい は、9 調査項目すべてでベイ表現を使用する意識は男性が女性を上回り、その差も若年層ほど僅差ではなく、明確な開きがある。

これらの結果から、若い世代に向けて、ベイ表現を使用しているという意識の性差がなくなりつつある傾向を見ることができよう。ベイ表現は専ら男性が使用するとされていた時代から、ベイ表現を男女の違いなく使用する、いわば「ベイ表現使用の平等化」が進んでいる様子をこの調査結果から読み取ることができる。

⑦ベイ表現

(1)「あの人はたぶん先生だろう」

北関東 3 県すべてにおいて、「ダベ」が優勢である。群馬県では、「ダンベー」「ダンベ」が、茨城県では「ダッペ」がそれに次ぐ。若年層では「ダベ」が、中年層では「ダンベー」が優勢であり、世代差が認められた。性差を見ると、男性、女性ともに、「ダベ」が優勢で性差はそれほど認められなかった。

(2)「あの人は今日学校に行くだろうか」「たぶん行くだろう」

北関東 3 県すべてにおいて、「ベ」が優勢である。群馬県では「ダンベー」「ダンベ」「ンベ」がそれに次ぎ、4 形式が混在している。栃木県、茨城県では、「ベー」がそれに次ぎ、「ベ」と「ベー」がほとんどである。若年層では「ベ」「ベー」が優勢であるのに対し、中年層では「ベー」「ベ」「ダンベー」「ダンベ」「その他」が混在し、バラエティ豊かである。世代差が認められる。性差を見ると、男性、女性ともに、「ベ」「ベー」が優勢で性差はそれほど認められなかった。

(3)「あの人はどこへ行くのだろうか」「学校に行くのだろう」

群馬県では、「ンダンベ」「ンダンベー」「ベ」が優勢である。栃木県と茨城県では、「その他」と回答した割合が最も高い。「その他」以外では、栃木県は「ンダンベ」「ベ」、茨城県では「ンダッペ」「ンダッペー」が優勢である。世代差を見ても、若年層、中年層ともに「その他」の割合が最も高い。性差を見ても、男性、女性ともに「その他」の割合が最も高い。「のだ」文の場合、ベイ表現も含めて個人単位での様々な表現形式が存在するようである。

(4)「あの人は昨日学校に行っただろうか」「行っただろう」

北関東 3 県すべてにおいて、「ベ」が優勢である。群馬県では「ンベ」「ンベー」も同様に優勢である。茨城県では「ッペ」が同様に優勢である。若年層では「ベ」「ンベ」が優勢であるのに対し、中年層では「ンベー」「ッペ」が優勢で、世代差が認められる。

性差を見ると、男性、女性ともに、「ベ」が優勢で、「ンベ」や「ッペ」がそれに次ぎ、性差はそれほど認められなかった。

(5)「あの人はどこへ行ったのだろうか」「学校に行ったのだろう」

群馬県では、「ンダンベ」「ンダンベー」「ベ」が優勢で、調査項目 3 と一致する。栃木県と茨城県では、「その他」と回答した割合が最も高い。その他以外では、栃木県は「ベ」「ンダンベ」、茨城県では「ンダッペ」「ンダッペー」が優勢で、こちらも調査項目 3 と一致する。世代差と性差を見ても、「その他」の割合が高く、調査項目 3 と同様に、「のだ」文の過去推量表現においても、ベイ表現も含めて個人単位での様々な表現形式が存在している。

(6)「あの人は今日学校へ行くだろうか」「たぶん行かないだろう」

北関東 3 県すべてにおいて、「ベ」が優勢である。群馬県では「ベー」「ンベ」「ダンベ」「ダンベー」なども使用されている。栃木県と茨城県では「ベー」が「ベ」に次いで優勢で、この 2 形式が両県の多くを占めている。若年層では「ベ」が半数以上を占めて優勢であるのに対し、中年層では「ベー」のほか「ベ」「ダンベー」「その他」などが使われ、世代差が認められる。性差を見ると、男性、女性ともに、「ベ」が優勢で、「ベー」がそれに次ぎ、性差はそれほど認められなかった。

(7)そうしよう，という気持ちで「さあ，買い物に行こう」

北関東 3 県すべてにおいて、「ベ」が最も使用され、次いで「ベー」が使用されている。地域差はほとんど認められない。世代差については、若年層、中年層ともに「ベ」が最も使用され、次いで「ベー」が使用されている。ただし、若年層に比べ中年層では「ベー」が「ベ」に近い勢力を持っている。性差を見ると、男性、女性ともに、「ベ」が優勢で、「ベー」がそれに次ぎ、性差も認められなかった。

(8)旅行に行くように促されて，「それじゃ，行こう」

(7)と同様の傾向であった。

(9)「いっしょに行こうよ」と誘う

群馬県においては「ベー」有力で次いで「ベ」が優勢である。栃木県、茨城県においては「ベ」が有力で次いで「ベー」優勢であ

る。3 県ともに「べー」と「べ」が有力であることに変わりはないが、地域差が存在した。世代差についても、若年層では「べ」が最有力で「べー」がそれに次ぐのに対し、中年層では「べー」が最有力で「べ」がそれに次ぎ、「その他」の割合も高かった。世代差が存在した。性差を見ると、男性、女性ともに、「べ」が優勢で、「べー」がそれに次ぎ、性差は認められなかった。

⑧調査結果の考察のまとめ

北関東３県においては、ベイ表現の使用・不使用意識に地域差があり、使用意識が最も高いのは栃木県、不使用意識が最も高い傾向にあるのは茨城県であった。また、ベイ表現を耳にする（使わないが聞く）と意識する人の割合にも意味による地域差があった。

ベイ表現の使用・不使用意識には世代差もあり、ベイ表現を使用すると意識している人の割合も、使用しないと意識している人の割合も、中年層よりも若年層が高い傾向にあった。ベイ表現の使用意識が中年層よりも若年層の方が高い傾向にあるということは、若い世代に向けて共通語化が進むという考え方を覆す結果である。また、若年層のベイ表現使用意識に対する二極化が見られたことは、注目に値する動きであろう。若い世代において、ベイ表現を積極的に使用しようとする、いわば「方言志向」のグループと、ベイ表現を否定し共通語を使用しようとする、いわば、「共通語志向」のグループとがあると考えられる。

ベイ表現の使用・不使用意識の性差については、顕著ではないが、使用意識は男性の方が高く、不使用意識は女性の方が高い傾向にあった。

世代別の地域差について、若年層では、使用意識が最も高いのは栃木県、不使用意識が最も高い傾向にあるのは茨城県であった。この傾向は北関東全体の傾向と同様であるが、若年層ではその差が顕著であった。栃木県の若年層において、ベイ表現の使用意識が高い傾向にある最大の要因は、群馬県や茨城県とは異なる栃木県の地理的な特殊性にあると考えられるが、これについてはデータの詳細な検証が必要である。中年層では、使用意識および耳にするという意識が高い傾向にあるのは群馬県で、不使用意識が高い傾向にあるのは茨城県であった。世代により地域差やその程度が必ずしも一致しない要因は、社会的な立場や生活環境により、中年層における共通語化の進展によるものが大きいと考えられる。

性別の地域差について、ベイ表現を使用すると意識する傾向の高い県は男性女性ともに栃木県であり、使用しないと意識する県は男性女性ともに茨城県であった。この結果は北関東全域の地域差に一致した。なお、栃木県の男性においては、推量表現のベイ表現が盛んに使用されているという調査結果が得られた。

性別の世代差について、男性女性ともに、上記の世代差と同様であった。

ベイ表現については、本報告では詳細な考察に至らなかったため、今後の課題としたい。全体的な傾向として、最有力なベイ表現に極端な地域差は認められないが、それに次ぐベイ表現に地域的な特色が見られた。世代差としては、若年層よりも中年層の方がベイ表現にバラエティさがうかがえた。男女差はあまり認められなかった。また、推量表現よりも意志・勧誘表現においてベイ表現がより多く使用されている傾向が見られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① 佐藤髙司、「北関東 3 県における若・中年層のベイ表現に関する調査報告（速報）」、共愛学園前橋国際大学論集、査読無、14、2014、pp.95-108

② 佐藤髙司、「群馬県方言におけるベー類の動態―若年層に対する 30 年の経年調査から―」、明海日本語第 18 号増刊号 井上史雄先生古稀祝いオンライン論文集、査読無、2013、pp.99-112

③ 佐藤髙司、「若年層の方言使用と「学校方言」」、共愛学園前橋国際大学論集、査読有、12、2012、pp.17-30 http://hdl.handle.net/10087/7193

〔学会発表〕（計　1　件）

① 佐藤髙司、「群馬県方言におけるベーの動態―若年層に対する 30 年間の経年調査から―」、日本語学会、2011.5.19、神戸大学

〔図書〕（計　2　件）

① 佐藤髙司、自家版、『北関東におけるベイ表現の動態に関する研究』、2014、101

② 佐藤髙司、ひつじ書房、『新方言の動態 30 年の研究』、2013、257

ホームページ等
http://www.satotaka.net/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤髙司（SATO，Takashi）
共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・教授
研究者番号：80390409